

日本民族性と佛教の発展 (二)

鈴木大拙

第一講 (承前)

それから、それと関連して、不完全なもの形の整わぬものをそのままに美と見る。是れは岡倉覚三さんでしたか、あれの著述の中に、形の整わぬものはその整わぬところに整うものを示される、そこに不完全なもの面白味が出るのだ、こういうふう書いておられたように思うのです。形が不完全なものだから、それよりもっと完全なものと思われる一つの示唆になるということです。それと、不完全なものを面白いということにする資格が日本人にあるといわれているが、私はそうじゃないと思うのです。私は不完全なものを不完全なままに美と見る。不完全なものが別の完全なものを示唆する限り不完全なもの美がある、と、こういわないで、不完全なものがそのまま美なんです。この性格を一つ見ておかんといかん。不完全なものをそのまま美と見る。

これに不完全という名を附けたらいかんだろうけれども、何かこれをやはり美術家か美学のことを研究なさる御方

は、特別にうまい名を付けられると思うが、不完全といえども既に完全なものを予期しているのだ。そんなら汚いといつてよいかというと、汚いということもいい難いが、例えば茶の湯の茶碗ですナ、お茶碗というものは大抵不完全で、円いものや四角なものでは決してない。どこか細工なものに定っておる。薬をかけたもの、半分かけて半分かけなかったり、色んなものがあるのですナ。そうしておつてそれを非常に喜んでおるのですナ。そんならそれが面白くないかという、われわれ無風流なものが見ても、やはり何となく面白いようなところがあるのですナ。それであるから、あれを不完全とか不具、不具というとか跛とか盲のようになるけれども、具っていないといつては悪いですが、兎に角、形が整わぬ、それで整っているから整わぬというわけにはいかない、そういうものを見る傾き、性格が日本人にあると私は思うのです。

それで、よくお茶をやった人がいうが、外国の人でこういう茶の湯が分るかどうかと、こういうのですけれども、それは分らぬかも知れない。分らぬかも知れないが、日本人が分るような意味に分らうともしていかないだろう。われわれがヨーロッパの人が分るとか、アメリカのものが分るとか、色んなことをいうけれども、われわれは決してヨーロッパ人がヨーロッパ自身を解しておるように、ヨーロッパ人をわれわれは分っていないと思うのです。それは、どうしても日本人の眼で分っておるから、向うの人が向うの自分達を分っておるように分っていないと思う。それはやむを得ないと思う。どこでもそういうものだと思うのですが、それと同様にお茶の方の趣味というようなものも、外国の人にはわれわれが分っておるようなふうには分らぬだろうが、しかしまた向うの人は向うの人のような按配にそれを取入れて、それを解釈することがあるのだと思うのです。

実は音楽のことは分りませぬが、フランスのボツシェというのですか、何とかいうのが、音楽をやったお方は御存知だろうが、その人が大分東洋風、日本風の音楽の作品の譜を拵えたということを聞いておりますが、その人はどうしてそういう日本風なものを拵え出したかという、何か日本の絵でも見たのでしうか。日本にはよく蝦蟇ガがおる

ですナ。蝦蟇を色んな形に変えて、一寸した床飾りにしたり何かしてあるでしょう。あれを見て、そうしてあの蝦蟇の中から出たところの日本の美というものを一つ吸込んで、そうしてそれを音楽に翻訳したわけなんです。そういうものが、われわれ音楽を知らぬから、どういうふうに分かるか知りませぬけれども、フランス人はフランス風に訳したものでしょうと思う。そうするとあの蝦蟇の不細工なところがやはり外国の人でも分らぬことはないのだろうと思うのです。蝦蟇というのは、これは外国の人は悪魔の使いのような按配に考えておる。キリストの悪魔の使いのような按配に考えておる。そうしてよくキリストの悪魔に誘惑された絵などの側に蝦蟇がちよこんと坐っておるのが時々見えることがあるのです。だから蝦蟇というものは余り面白くないものになっておる。

ところが、日本ではあの蝦蟇というものが、如何にも大吉の気風を持つておるといふか、近代の動物じゃないと思われる位なものです。頭へ一寸触つても知らぬ顔をしておる。どこかもう少し強くつくと一寸跳んで行くかと思つとまたじつとしておる。極めて面白いものです。形はそう面白い形はしていかないのだけれども、あの蝦蟇を通して、何だか、日光や何か、ああいふ立派な宮殿を見たような感じと違つたものが、蝦蟇の形を通して見えるのです。そういうものがお茶道具を見ると同じような気分というわけではなからうが、そこに何だか似通つたものが見られる。そこにやはり一つの民族性というふうなものを見たいと思つたのです。

もつと教え上げるといふと色々あるかも知れぬが、大体その位にして置く。というのは、佛教の話をする場合に、それを直ちに利用して見たいと思うからなんです。何にでも順応して行く、それから順応するといふところには余り分別を入れない、計らいを入れないといふところがある。それから大きなものを小さいものの中に見る。それから不完全なものに何でも一つのおかし味を見る。すなわち面白いものを小さいものの中に見る。それから不愉快なものに何でも一つのおかし味を見る。すなわち面白いものを見て行く。こういう性格を日本の民族性といつてよいか悪いか分りませぬけれども、兎に角、われわれの性格の中にそういうものが入っているように思われる。これが佛教を取入れるに對して、どういふように佛教を發展させるか、佛教を日本に移住させて、そうして自分のものに

して行くと、どういう影響が佛教の上に与えられて来たか、そういうことを申し上げたいと思うのです。

それについては、日本人の性格というものの最もはつきり出てきたのは鎌倉時代だと、こういいたいと思うのです。例の万葉集時代というものは、まあ所謂、純情そのままというか、極めて素朴な世界であって、宗教というものは未だ出ていないのです。何か佛教に似たようなことは万葉集の歌の中にも出て来るようでもありますけれども、あれはただ真似ただけで、本当のことは分っていないのです。平安朝時代というものは、貴族の文化であって、それは公卿文化といつてよかろうと思うのです。公卿文化というものは、どうしても虚飾、儀式、形式張ったところばかりあって、そこには本当のものは出て来ない。その本当に出て来るのは、土に親しんだ生活をやっておるものの中でないという¹と出て来ないと思うのです。公卿文化というものはうわつらな生活であって、決して、事実というか、実際にかわつた生活でないのです。それで虚偽が多いのです。大きく分けますというと、日本の文化は三つの形態を取つておると思うのです。貴族文化と武家文化と平民文化ということを見ようと思うのですが、平安朝時代というものは貴族文化である。そこでは本当の日本のものは出ていない。それは同じ日本国民であるから日本的なものとは出ておるけれども、宗教的に本当のものが現われていない。日本の貴族文化もやはり日本的であつて、それ以外のものでは決してないのだが、宗教の方面から見るといふと、あそこには本当のものは出て来ないと思うのです。それが出てくるのは鎌倉時代であつたと思います。

鎌倉時代に初めて大地というものと、日本人との関係が宗教的に現われて来たと思うのです。大地即ち地面というのは、二通りの意味を持つて来るのです。一方では地面がなかつたらどうも出来ぬわけです。われわれは如何にも星を眺めて、天空を突取ろうというようなこともやるけれども、大地はどうしても離れられぬのです。幾ら飛び上つても落ちて来るところは土地です。飛行機にしても幾ら上つて行つたところが地面がなかつたら降りて来ることも出来ないし、飛ぶことも出来ないし、基地がないといかぬ。落ちるところはどこへ落ちて来てもやはり地面に落ちる

わけです。そういう意味において地面というものの意味が非常に尊いのです。われわれは太陽というものもなくはならぬけれども、太陽は寧ろ恐るべきような傾きがありはしないか。夏の日は畏るべし、冬の日は愛すべしといううな太陽の方は寧ろ地面ほどの親しみがない。手が届かぬ太陽の方は、それで威赫的な意味を持っておる。ところが地面はそうでなくして、頗る親しみを持っておると思うのです。われわれは地面は汚いというけれども、地面はみな浄化するのです。何でもかんでもみな地面の中へ吸込んでしまう。如何に汚いものでもみんな綺麗になってしまふのです。太陽はそうじゃなくして人間が死んでしまえば汚いものにしてしまふのです。その汚い人間を地面は黙って吸込んでしまっておるのです。そうしていつの間にか綺麗になっておる。

それから、われわれが地面に何か託して置けば、地面は十分に世話をやいてくれるのです。これは西洋の言葉なんですけれども、マザー・アース、母の大地といいますが、地面の母ということです。地面が母性を持つておるといいますが、それと同じく、母性的大地というような意味で、そういう言葉があるのです。どこの言葉であるか、ギリシャあたりの言葉かも知れぬのですが、実際、地面は母の役目を務めてくれるのです。何でもかんでも産んでくれるのです。この頃は食糧が喧しみのだが、地面へ預けて置くというところ、綺麗にやってくれるのです。実際有難いと思うが、その地面に本当に親しみ得たというのは、これが鎌倉時代であって、鎌倉武士と百姓というものが出来た。武士も百姓も悉く地面に関係を持つておるものなんです。公卿さんの方は地面に直接な関係を持たない、うわつたらに、ふわりとしておるわけです。雲の上人というようなことをいうのですけれども、その通りです。土百姓とか、お土ヤマトなんか野武士などといいますが、如何にも山から出たというか、田圃から出てきたような心持が伺われるのです。そこにその文化といい、本当の宗教というものが見えるようです。うわべを飾ったものは宗教ではない。宗教は実際をもとにしておる。真実ということをもとにしておる。その真实性の最も強いのは事実上において、また象徴の意味において大地そのものである。その大地というものが宗教的に働いて出来たのは鎌倉時代だ。そうしてそのときに佛教が本

当の意味において日本人に取入れられてきた。私はこういいたいのです。

平安時代に伝教大師とか弘法大師とかいうような偉いお方が出て来られて、そうして南都北嶺というか、奈良にしても叡山にしても立派な佛教が出来ておる。けれどもあれは、みんなやはり雲の上人の、ある意味でいうと官僚物というわけにはいかぬけれども、あの傾きはそういう意味になっておるのです。で、坊さんが綺麗な衣を着て、そうしてお経を読んで、何かまあ、そこらあたりで大宮人と一緒に、御殿でぞろりと春の日長に如何にも悠長に暮される平安朝の趣がそこへ浮んで来るように思っています。京都の山々を見ておると、時々そういうことを思うのだが、如何にも坊さんの着飾った様子、それから公卿さん、十二単衣ヒトエというのですか、まあ紫式部や清少納言という女の人が、清少納言などなかなか偉いことを書いておるのですが、今は活動写真のような、次から次と、後を追っかけるように行かぬと、むしろは目が痛くなつてとても長く見ておれぬのですが、ああいう刺戟の多いものを好むのだが、昔の平安朝時代には、この京都の山紫水明の間に坊さんが行列でもしたり、お経が上ったり、それから笙ショウ、筆ヒツ策サツのようなのが如何にも穏かな、それがその頃に享樂せられたものだ、こう思つてもよいと思ふのだが。そういうと工合の悪い点もあるけれども、事実そういう点が余程あつたと思つておるのです。佛教は一つの歓樂で、極樂というふうなものも、その歓樂の境界を延長したわけなんです。何か今日、浄土系の人々が極樂というものを感ずると大分違つて、その平安朝時代の公卿文化の歓樂境をそのまま、死んでしまつてもずっとまた向うへ延長させたいというのが極樂で、鳳凰堂の中に描いたというような色彩の如何にも濃厚な歓樂極らないものを向うに見ようというのが、これが藤原文化の歓樂的世界の投影、すなわちそれを向うへ投げ出したのが、その頃の浄土観であつたらうと思つておるのです。だから極めて浅薄といへば浅薄なものです。何も宗教というものはなかつたわけです。

ところが、如何にそういう公卿文化でも亡びるときはきつとあるので、まあ二百年、三百年、いまなら三百年も続くわけはなからうけれども、その頃は今日などと違つてテンポがすこぶるゆるやかなものであるから、まあ二百年も

三百年も夢を見た。そう思ってもよいかもしれぬ。お宮で時々やるあのお神楽などを聞いても、如何にもゆつたりしたものですナ。私の知っておる人で外国の人が、いまわし自身がそうだが、あんなものを聞いておると眠いというか、何だかおかしい心になるですナ。外国の人がそういうことを言います。ここで聞いておるからいけないのだ。あれをいまから千年前なら千年前にさかのぼったと思つて聞いて御覧なさい。そのときの心持が出て、あのピーというところで足をトンとやるというと、そのときの気分がそこへ出てくるという。そうすると何だか浮世離れをして面白いじゃないかという。そういう工合に想像力の豊富なものが聞くと、如何にもあのピー、ドンの世界も面白いのです。そのときはテンポがゆるやかなんだからそれでよいのだが、そういう時代が三百年つづくか四百年つづいたら、それはどうしても亡びなくてはならぬ。榮枯盛衰、盛者必衰ということは祇園精舎の鐘の音でちゃんとわからなければならぬのじゃから、そうなるのですがネ。

そこで鎌倉という時代が出てきた。あれが日本だけだから何ですけれども、やはり一種の思想戦でしょう。今日の世界をあげての戦争と同じように、思想戦の行詰り、もの考え方、行詰りということになるだろうと私は思つておるのです。そこで行詰りというものが鎌倉時代に出てくる。

これは話が余所へそれますけれども、行詰りのことを申しあげますと、家ということをよく今日いうでしょう。日本は家をもとにしておる。それで家庭というものの生活を、日本国家の一つの生活単位というように考えようとしておるでしょう。ところがあの考えというものには、どうしても地面というものがなくといかぬのだナ。地面というものがくつついていないというと、家というものは考えられないと思うのです。今日のような塩梅に、地面と人間というものが、しょっちゅう離れていこうとしておる、また離れなければならぬようになっておる都会生活というものは、今日の集団的生活がもう必要条件のようになっておる。今日は戦さで都会の人間がどこかへ出ていかならんというようなことも申します。けれども、今日のこの産業というか、工業というか、それは政府が資本主にならうが、

個人が資本主になろうが、どっちになろうが、かまいはしないが、大きな資本のもとに大きな工場で、複雑な機械で、沢山の人間が動いておるといふことになる、あそこには家といふものの考えはどうしても出てこない。従って大地といふものの考え方は出てこないのです。ここの地面は先祖が開いたのだ、そうしてここの田圃は親父の親が耕したのだ、この倉はわしの二代目の爺さんがやったのだ、そうしてここの家は、この部屋はどうだとか、あの部屋はどうだとか、ここに持つておるところのこの佛壇は誰が拵えたとかいふことがあって、初めて家といふようなことも出てくるのです。

ところが今日はそうじゃなくて、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしなければならぬ。家財道具などといううなものをもっておつては、面倒くさくてしょうがない。だから家財道具というものは、なるべく簡単にしておかねばならぬ。ことにあのお役人などをやっておる人は、いまは一年京都府知事をやっておつても、また二年か三年で大阪へ行かなければならぬ。大阪ならよいけれども、満州へ行ってしまうならん。そのたびにお膳を持つとか、茶碗を持つとかいふわけにはいかぬから、自分の使つておる机にしても本箱にしても、売つて行かなければならぬ。どこに家があるかわからぬ。水草を追つて転居すといふような塩梅で、蒙古の人民は家畜が食べる草があるとそこへ行つて、なくなると他へ行くといふような塩梅に、家といふことにはないのです。蒙古人に家といふ考えがあるかどうか、それは知らぬが、どうしても農民生活をしていないといふと、家といふものは考えられぬのです。

今日の機械文明といふようなものでは、どうしても家といふものを考へるといふわけに行かなくなると思ふのです。それが良いか悪いか別問題だけれども、そういうふうになつて行くのです。それを逆戻しにして、家といふものを考へなければならぬとすると、近代工業的、科学的、大資本的生活といふものを根本から変えていかなければならぬと思ふのです。そうするとそれをどうするか。これが日本だけで他の国と関係なければよいのだけれども、他の国がだんだん變つてゆくところへ日本だけが變らずにおられるといふわけにどうしてもいかんどうし、變らずにおるとい

うことは亡びるということの意味になるから、変っていかなければならぬと思うのです。ここが一種のジレンマであって、どうしても何とか打開の道を考えなくてはならぬと思うのです。考えても駄目なものかもしれない。そうしたら、まあ、そのままいかんならんが、あまりいままでの政府の指導者というか、社会の指導者という人は、そういう点を考えないようなことがありはしないかと思うのですが、考えるなら徹底して考えて、そうしてどこどこまでも計画的にずんずん推していかならんと思う。けれどもそうでなしに、一寸の思いつきでものをやられていたら、却って思わぬ方向へ物事が進んで行きはしないか。こういうようなことが、大地の生活というか、大地の宗教からものを考えると、いと余程大事なことになるのですがネ。

昔の佛教などが、鎌倉時代において地面と非常な關係をもってきたところの、その地面というものを考えると、今日の集團的生活というものが地面を土台にしたところの生活でなくなるとすると、この佛教というものも、今日の世界に應ずるだけの何か用意をしておかんならんんじゃないかと思うのですがネ。単に昔の通りを今日に伝えるというわけにはいかんだろう。社会が變ってゆくから、それに應ずるだけの用意をしていかならん。それが昔のように島国で限られて、それだけで生活をしてゆくことのできるものであるならば、環境のままでも意識しないで、何等の計画もしないで、計らいも何も立てないで、いわゆる自然法爾的にずんずん動いていったらば、それでよからうけれども、今日はそこにやはり計画を立てていかんならんと思うのです。意識的にこれはこう、あれはああ、というて幾らか計らいをもって、少くとも五十年、百年の先の見通しをつけていかならんと思うのです。見通しをつけても不思議な働きがどこからか出てきて駄目になる場合もあるだろう。しかしながら、それが駄目になるからといって、いまの場合に何等の考えも持たずに、いわゆる、意々随々のにいったらば、私は駄目になると思うのです。それではとても世界との競争はできなくなるだろう。

ロシアでも計画的にものをやる。ドイツでも計画的にやる。英米でも計画的にものをやってゆく。こうしたらば、

日本だけが計画的にいかぬというわけにはいかんだろう。そうして、その計画的なものも日本的なやり方でないというといかんと思う。ロシアの真似をそのままもってきても駄目だし、況んやドイツの真似をそのままもってきたところが、日本は到底ドイツじゃないから、そうしてドイツの人民じゃないから、日本の島で日本の民族で日本国民であるから、その点は余程違うと思うのです。ただ翻訳してもいかんだろう。況んや宗教においては、われわれ佛教徒としては、いままでの考え方をやめ、いままでの行き方をやめて、そうして先のことを考えて、自分だけに順応するということでなくして、先のことをずっと考えて行って、われわれがもっておる佛教的体験というものがなければならぬから、それを活かしていくということが一番大事だと思う。

これをいま私は申上げようとしておる。明日申そうとしておるところと何等関係のないように思われるけれども、そうでなくして、歴史的にいままでの佛教が発展したというそのあとをつけてゆくについて、またこれからさき、これから未来に互って佛教をどういうふうに展開さして行っていくか、ということを考えなくちゃならぬ。こう思うから、そういうところから、この話も出たわけなんでありますが、余程私はその点において深い考えをもっておらぬというといかんのじゃないか。余程心配でならないのですナ。ただうかうかとこのままでうつつていったらば、どうも何だかんだといっておるけれども、その通りになるかなと思う。余程心配になるのですがネ。実際、佛教者としてはその点を余程慎重に考えていかんならんと思うのです。

昨日も三高の人に話したが、若い人はもう行動心理というか、考えるというよりもむしろ動くという方が主になるだろうが、私共年寄りになるといって、動くという方は到底駄目なんです。やはり自然に前のこと後のことを考えます。反省的な思想的な方面に話移ってゆくのですナ。そうするといつて、いろいろな心配なことが出て来るのですナ。それで若い人がちゃんとこれを用意しておくわけで、年寄りにはさっさと死んでしまつたらそれでよいのだ。けれども、かえつていまのところは、若い人が死んでいつてしまつて残されるのは年寄りというようになつたらば、

これをどうするかですナ。われわれは考えてもどうも考えを実行に移す点においては、やはり若い人に待たなくてはならぬので、一種妙な立場におかされるのですナ。それでも若い人はみな死ぬのでないから、これから追々にまた出て来るだろうから、まあ考えるだけは考えておいてもよいので、まあひそかにそういうことに落着いておるのですけれどもネ。

それでは、今日はまあこういうことにおきまして、甚だまとまりのつかないような、お話を漫談的に申上げてすみませぬけれども、明日はもう少しお話がまとまりがありはしないかと思ひます。私は日蓮上人のことを知らぬので困っておるのですけれども、鎌倉時代にまあ浄土系の思想と日蓮宗の方と、それから禅とこの三つのものが日本の民族の宗教的要求として出て来て、そうしてことに真宗の方において特殊の発展をしておるから、そいつをこれから東亜、東亜じゃない、世界の、いまは政治家でも経済家でも大東亜というけれども、われわれはもう大東亜をもう一つ越えた大世界というか、世界全体を相手にしたものを考えたいと思ふのですがネ。

ざっと申しますと、この戦さがどうなつても勝たなければならぬので勝つに相違ないだろうが、勝つたあとがどうなるかという、わしは世界は四つに多分わかれると思ふのです。その四つは経済的にも政治的にも、そういうことはどうでも、私には頓着はないが、兎に角、思想の方面から見ても、どうしても新たなものが出てくるにきまつておるから、それは一つはロシアから出る。ロシアはいままでスラブで大した世界文化に貢献をしていないといふかも知れぬが、私はロシアから一つ何か出ると思ふのです。それから今度はヨーロッパに一つ出てくると思ふのです。これはもう間違いない。ドイツがやるか、イギリスがやるかわからぬけれども、ヨーロッパに一つ出てくる。それからアメリカに一つまた出てくると思ふのです。アメリカはヨーロッパの延長のように考えるけれどもそうじゃない。アメリカにもまた特殊なものが出てくるのですナ。ヨーロッパの人からアメリカを見るといふと、われわれはアメリカはヨーロッパの延長だと思つておるけれども、ヨーロッパの人はアメリカもまた特殊の文化といふものを持つとしてお

るのです。そうしてアメリカ化することを非常に嫌がっておるのです。嫌がっているがだんだんアメリカ化して行くようなことがあるらしいのです。たとえばドイツがアメリカの大量生産というものを取入れる。大量生産ということはアメリカから出たことです。ドイツの方は極めて正確に、きちんとやって行こうという。アメリカはきちんとやることよりも、兎に角実用になればよいというので大量的に生産して行くという。それをドイツが真似して工場を整理したということです。それから今日ドイツが戦さに強いということも、自分の精密な機械を拵えることの上手というところへ、アメリカの大量生産を取入れたからだと思ふのです。それつまり思想の一部だが、そういうようなものも何か出てくるに決っておる。幾らアメリカが敗けても亡びてしまうという氣遣いはなからう。何かそこから出てくる。

その次に出てくるのは東洋だと思ふのです。東洋に一つ出てくる。それには日本というもの、シナというもの、インドというものが大事です。こういうと何だが、タイとか、ビルマとか、フィリッピンとか、政治的には意味があるでしょう。ああいう国は大東亜会議とかいうようなものを日本がやれば何か意味があるだろうが、これを思想文化の方面からみてみると、勘定の中へ入れなくてもよからうと思ふ。それよりもシナが大事だと思ふのです。インドはどうなるかわからぬけれども、まあインドは東洋の文化を生んだ母の一人であるからどういふ工合になるかわかりませぬけれども、政治的には兎に角として、シナが何かそういうものを生み出すだろうと思ひます。愚図愚図しておるといふと、日本がシナに取られてしまはしないかといふことがあるのです。思想の上においてその点が余程考へねばならぬと思ふ。そうして日本人が、うかうかしておたらば、いまはそれでよいかもしれぬけれども、これから五十年、百年という長いかもしれぬが、思想からみれば、十年、二十年というものは大したことのないものですから、まあ五十年、百年の間に、日本が余程に踏張っていないといふと、踏張りようによるのですけれども、ただ肩を怒らして力んでおつても何にもならぬから、じつと落着いて坐つて何か生み出すものを持たんならぬのです。そう

ということがないといかぬと思う。それには今日の日本というものは非常に責任があるのじゃなからうかと思うのです。ことに若い人の方に責任があると思うのです。それをどうかして佛教の方から、佛教という名をつけてはいかぬかもしれないのですが、佛教という名をつけないで東洋的なるものともいうか、そういうふうにして、ヨーロッパやロシアやアメリカから出て来るもの、それとわしらの大望というか、望みというものは、ヨーロッパから出て来るものも、アメリカから出て来るものも、みな包んでしまおうというわけなんです。それと競争して喧嘩するということではないから、まあ大風呂敷といえど大風呂敷だが、みんなそれを引入れてやるというのがわれわれの大望というか、主眼です。そういう工合にしたいと思うのです。

(第一講、了)